広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第79集

長後林古墓群発掘調査報告書

1989

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

長後林古墓群発掘調査報告書

1989

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，昭和63（1988）年度に実施した広島県高田郡吉田町の県営ほ場整備事業（丹比地区）に係わる長後林古墓群（広島県高田郡吉田町大字多治比字長後林1272・1240－3）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，長後林1号古墓については財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが広島県可部農林事務所から委託を受けて，調査研究員の尾崎光伸・林　健亮が行った。また，長後林2号古墓の発掘調査は広島県教育委員会が国庫補助金（農家負担分）を受けて，文化課文化財保護主事唐口勉三が行った。

3．本書の執筆は，文化課文化財保護主事木村信幸（II）・唐口（III－2）・尾崎（I・III－1・IV）が分担して行い，尾崎が編集した。

4．本書に使用した方位はすべて磁北である。

5．第1図は，建設省国土地理院発行の1：25,000の地形図（安芸横田）を使用した。

目　　次

I．はじめに……（1）

II．位置と環境……（2）

III．調査の遺跡

1．長後林1号古墓……（6）

2．長後林2号古墓……（10）

IV．まとめ……（12）

図 版 目 次

図版 1　a．長後林古墓群遠景（北から）
　　b．長後林 1 号古墓作業風景（南から）
図版 2　a．長後林 1 号古墓積石部検出状況（南から）
　　b．同上（西から）
図版 3　a．長後林 1 号古墓積石部除去（南から）
　　b．同上石垣状遺構検出状況（西から）
図版 4　　長後林 1 号古墓出土遺物
図版 5　a．長後林 2 号古墓検出状況（南から）
　　b．同上完掘状況（南から）

挿 図 目 次

第 1 図　周辺遺跡分布図（1：25,000）……（3）
第 2 図　周辺地形図（1：2,000）……（5）
第 3 図　長後林 1 号古墓積石部実測図（1：40）……（折込）
第 4 図　長後林 1 号古墓土坑・石列・石垣状遺構実測図（1：40）……（折込）
第 5 図　長後林 1 号古墓土坑実測図（1：30）……（7）
第 6 図　石垣状遺構実測図（1：40）……（8）
第 7 図　長後林 1 号古墓出土遺物実測図（1：2）……（9）
第 8 図　五輪塔実測図（1：4）……（9）
第 9 図　空風輪梵字拓影（1：3）……（9）
第10図　長後林 2 号古墓実測図（1：30）……（11）

Ⅰ．はじめに

県営ほ場整備事業（丹比地区）は，同地域内の耕地の不整形，狭小などのため生産基盤の整備を図り，これにより農業生産の再編を図り生産の増大による農家の農業所得向上，生活環境の整備を目的としたものである。

事業実施に先立って，広島県可部農林事務所高田地方耕地事業所（以下「高田地方耕地事業所」という。）は，昭和58（1983）年7月，広島県教育委員会（以下「県教委」という。）へ農業予定地内の埋蔵文化財の有無及び取扱いについて照会を行った。これを受けて県教委は分布調査を行い，予定地内において9遺跡を確認した。県教委では遺跡の取扱いに関して高田地方耕地事業所と協議を重ねたが，長後林1～3号古墓に関しては現状保存が困難なため，事前に発掘調査を行い記録保存を図ることとなった。なお3号古墓については発掘調査を行ったが，その結果，遺跡でないことが明らかとなったことから，本報告書には記載していない。

発掘調査は，文化庁と農林省との協議に基づき文化庁から都道府県教育委員会へ通知された「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日庁保記211号）により，経費は事業者負担分（80％）と農家負担分（20％）に分けて行うことになった。このうち事業者負担分を財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が，農家負担分を県教委が行うこととなった。調査は，長後林1号古墓の調査を10月3日から26日までセンターが行い，長後林2・3号古墓の調査を8月30日から9月9日まで県教委が行った。

調査にあたっては，地権者の大田伸一郎氏ほか地元の方々，広島県可部農林事務所高田地方耕地事業所，丹比地区土地改良区，吉田町教育委員会から多大な協力を頂いた。記して感謝の意を表する次第である。

II. 位置と環境

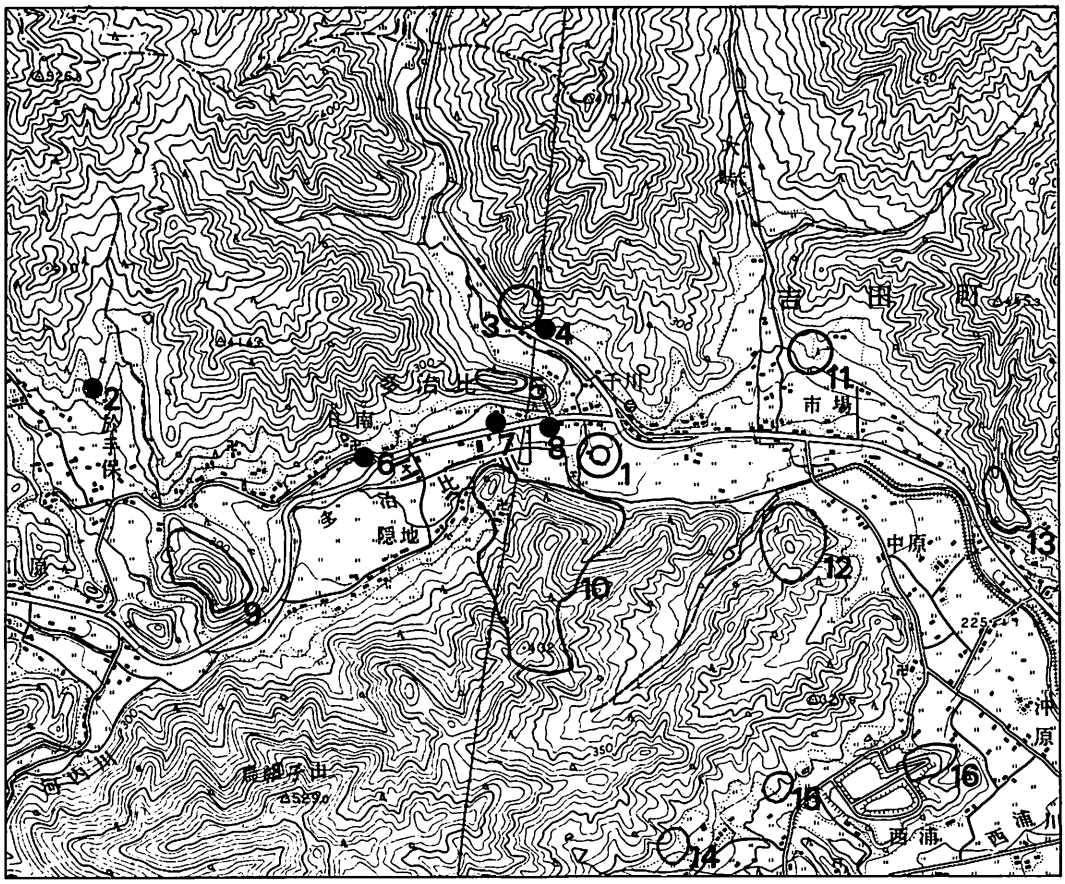
吉田町は，広島県の北西部，高田郡の中央部に位置する中国山地南側に開けた街である。町内を東北流する江の川と東南流する多治比川沿いに耕地と集落が開けており，両河川が合流する吉田地区には市街地が形成されている。ここは，古代以来山陽と山陰を結ぶ交通の要衝として，高田郡（古くは高宮郡）の政治・経済・文化の中心的役割を果してきた。

その吉田地区の北西，多治比川の上流に多治比がある。多治比は，室坂川・河内川・於手保川・奈良谷川・大峠川が多治比川と合流して河谷平野を形作り，肥沃な水田地帯となっている。北は横田・本郷（美土里町），西は土師（八千代町）・川井（山県郡千代田町），南は中馬（吉田町）と接する近世以来[1]の交通至便の地である。特に，奈良谷川沿いに北上する県道吉田瑞穂線沿いには，男山神社裏墳墓群・古墳群，千川古墳群，青木古墳群が存在し，また「倭名抄」の丹比郷を多治比から横田・本郷までの広がりとする説もあるので，このルートは早くから開けていたと考えられる。長後林古墓群は，その多治比の中央部，戦国期に毛利元就が「多治比殿」と呼ばれた時代に居城した猿掛城跡の直下の水田地帯に所在する。周囲には，平佐城跡・竹長城跡などの中世山城跡が存在するほか，井上備前宅跡など9か所の屋敷跡の伝承[2]もある。古墓は本古墓のほかに6基確認されている。いずれも，水田地帯や低丘陵上にあるにもかかわらず，墓やそれに類するものとして大切に保存されてきたもの[3]である。

そこで，ここでは，多治比地区の中世史を概観したい。

中世，この地区は「多治比保」と呼ばれ，内蔵寮所管の内侍所灯油料所として，安芸国役分2石2斗の進納が定められていた。いわゆる内蔵寮領便補保として，鎌倉時代初期までには成立したと考えられている。このように中央の公的な性格は，「多治比（丹比部）」や「土師（土師部）」などの地名が示唆するように，古く飛鳥時代にまで遡って考えることもできるであろう。こののち，嘉禎3（1237）年頃，多治比保は厳島神社が火災により焼失した際，その再建に用する人夫役を課せられたが，内蔵寮からの訴えによりその人夫役は免除されることとなった。また，永仁年間（1293～99）頃からは内侍所灯油料2石2斗の代わりに20貫文が代納されるようになったらしく，貨幣経済の浸透を見ることができる。

南北朝時代になると，建武3（1336）年に足利尊氏が本圀寺に造営料として多治比保を寄進したり，文和元（1352）年に安芸国守護武田氏信が熊谷直氏に対して多治比保内の柏村氏跡地頭職を預け置くなどの事実が知られる。多治比保の地頭柏村氏が一族を分出して所々を支配していたが，打ち続く戦乱に際して武田方（北朝・尊氏方）と対立し，毛利氏・



第1図　周辺遺跡分布図（1：25,000）

1．長後林古墓群　2．於手保古墳　3．千川古墳群　4．千川古墓　5．男山神社裏墳墓群・古墳群
6．日南1号古墓　7．日南2号古墓　8．日南3号古墓　9．平佐城跡　10．猿掛城跡
11．塚ケ鼻古墳群　12．竹長城跡　13．高猿山城跡　14．近安山城跡　15．高杉城跡　16．平家が城跡

寺原氏などの周辺の在地領主と共に南朝に味方したと思われる。

室町時代のこの地区の様相は，吉田を本拠とする毛利氏と横田を本拠とする高橋氏との関係の中で捉えていかなければならないだろう。明応9（1500）年，毛利弘元が次男松寿丸（のちの元就）を伴って多治比猿掛城に隠退する。その理由の一つとして「多治比保は郡山城すぐ北西の押えとなる要衝の地なのに，これまで毛利氏所領の中に名を現しておらず，（中略）この保を毛利氏が実力で手に入れたのは応仁の乱中であり，弘元はここを隠居領として握っておくことにより，その領有を確実なものにしておきたかった」という指摘[4]がある。多治比保は鎌倉時代以来内蔵寮領便補保として機能していたようだが，応仁の乱を契機として国役が未納となる[5]のは毛利氏の横領によると思われる。それ以前の支配の実態，

領有のあり方は不明であるが，内蔵寮領であるが故に，毛利・高橋両氏の非支配対象地，緩衝地的なあり方と想定できる[6]と思われる。

さて，多治比地区を毛利氏の所領として確保した弘元没後，松寿丸はその領有を継承したが，井上中務丞によって横領され，弘元の側室であった多治比の大方殿の土居屋敷に身を寄せていた。永正 8 (1511) 年，松寿丸は元服して元就と名乗るが，このときまでには多治比が彼のもとに返され，名実ともに「多治比殿」となる。以後，元就は本家を相続し，大戦国大名へと飛躍していく。その間の天文 9～10 (1540～41) 年の郡山合戦では，郡山直下の吉田地区のみならず，多治比地区の尾頸（猿掛城内か？）・瀬木・室坂等でも毛利軍と出雲の大名尼子軍が戦っていることが知られる。多治比地区に点在する古墓は，そのときの戦死者を葬ったものと考えることもできるであろう。毛利氏が中国地方の大大名として君臨する頃には，多治比保は毛利氏公領や家臣の給地として毛利氏の経済基盤の一端を担うのである。なお，多治比男山神社には，元亀 4 (1573) 年に毛利輝元が「武運長久　家門安寧」を祈願して再建した旨の棟札がある。輝元の父隆元も，天文 11 (1542) 年に出雲遠征に際して「霊神の應護」を祈って田 2 段を寄進している[7]ので，男山神社は毛利氏の庇護が厚かった[8]ものと思われる。

以上のように，中世の多治比地区は，内蔵寮領，毛利・高橋両氏の緩衝地，そして毛利氏の領有と変遷するのである。

（註）

(1) 『芸藩通史』巻 63　多治比村絵図。

(2) 『芸藩通史』巻 68　城墟，『毛利家文書』405・420。

(3) 広島県埋蔵文化財包蔵地調査カードによる。

(4) 河合正治『安芸毛利一族』97 頁　新人物往来社，昭和 59 (1984) 年。

(5) 『言継卿記』28　永禄 10 年 10 月 15 日条。

(6) 毛利・高橋両勢力の境界であること，多治比川と奈良谷川と男山神社に囲まれた地域を近世以来「古市」といい（前註 (1)），中世，男山神社の門前に市が存在したと推測できることなどから，「無縁所」的なあり方も想定できそうではあるが，明証が得られないので，このような表現に留めた（網野善彦『増補　無縁・公界・楽－日本中世の自由と平和』平凡社選書 58，昭和 62 (1987) 年　参照)。

(7) 『萩藩閥閲録遺漏』巻 4 の 1。

(8) 同神社には，ほかに元亀 2 (1571) 年に毛利氏家臣で平佐城主と思われる平佐就之から木造獅子頭が寄進されている（『広島県史』古代中世資料編　Ⅳ　1175 頁)。

（参考文献）
『広島県史』原始・古代　昭和55（1980）年，同中世　昭和59（1984）年。
『角川日本地名大辞典』34，広島県，昭和62（1987）年。
『広島県の地名』（平凡社）　昭和53（1978）年。

第2図　周辺地形図（1：2,000）　（1・1号古墓，2・2号古墓）

Ⅲ. 調 査 の 遺 跡

1．長後林1号古墓

長後林1号古墓は吉田町大字多治比1272に所在する。西を流れる奈良谷川から約50mの位置である。地形は北から南へ下るなだらかな斜面で，周囲は主に水田として利用されている。標高は約235mである。

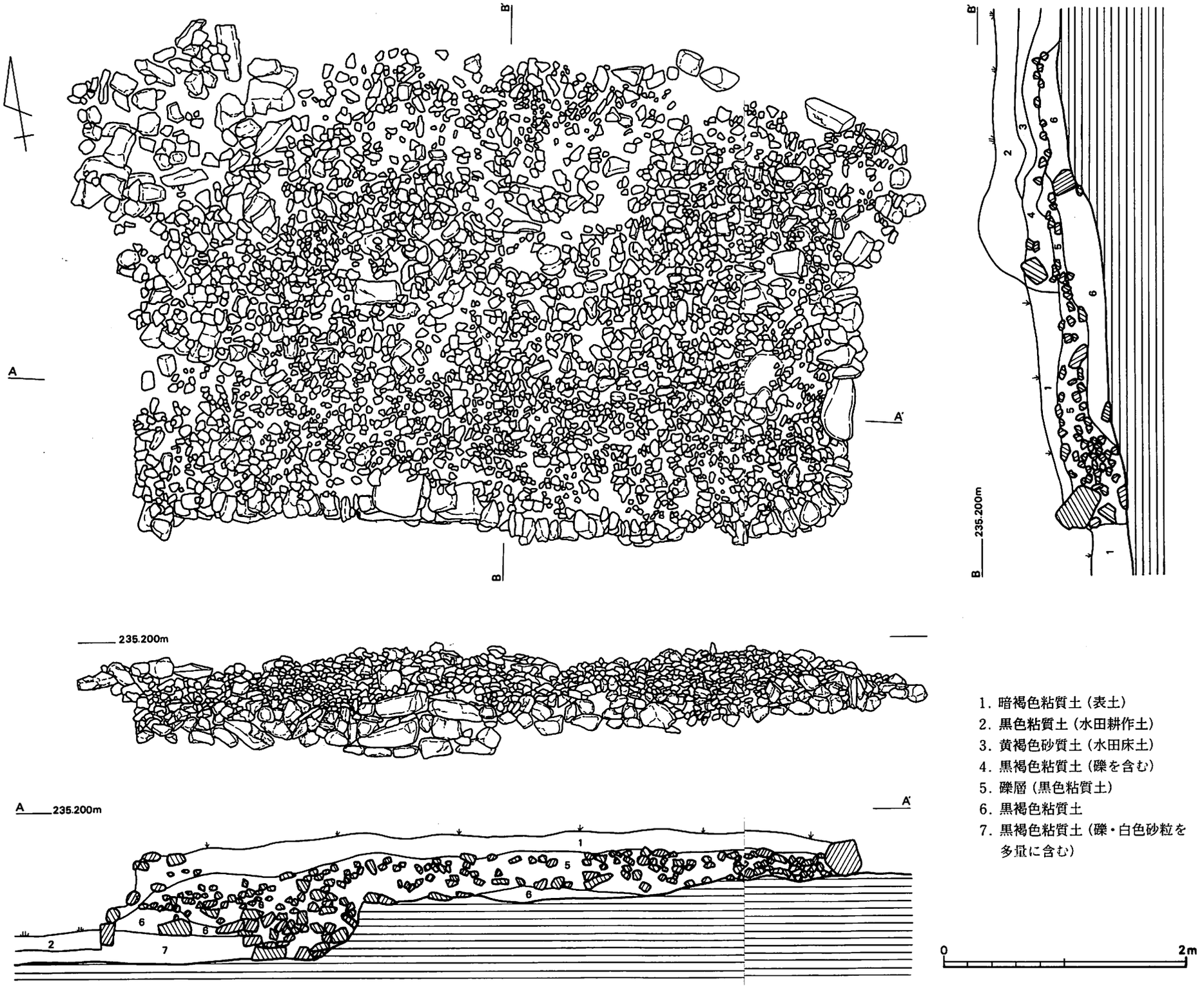
古墓は東西約6.0m，南北約3.5～4.0mで，ほぼ長方形の積石塚である。四辺はほぼ東西南北を指す。使用されている礫はすべて河原石で，これらは河岸段丘上に立地する本古墓の周辺や河川から容易に入手できるものである。古墓の東壁及び南壁は，径15～50cmの扁平な石や，径10～15cm，長さ20～30cmの細長い石を小口積みに用いて基壇状に2～3段に積み上げている。高さは20～50cmである。しかし，南辺の下端の一部の石を除いて，これらはすべて後世の積み上げによるものと思われる。一方，北壁及び西壁は石の積み上げは少なく，使用されている礫もすべて小円礫である。積石は径20cm以下の小円礫が中心であり，特に南半に密集している。一方北半は径20～40cmの角礫を用い，その分布は比較的疎らである。特に北西隅は石が大きく，配置も乱雑である。なお，北東隅には約50×70cmの方形の突出部が見られる。縁辺部に径約20cmの円礫を「コ」の字状に一段にならべ，径10cm以下の小円礫をその内側に詰めている。

積石の厚さは，南側で50cm，北側で10cmである。すなわち，レベルの低い位置ほど厚く石を積むことによって，上面のレベルをそろえている。積石下に黒褐色土が堆積しているが，検出した土坑はすべてこの面から掘り込まれており，盛土ではないと思われる。また，地山整形が行われた痕跡はみられない。

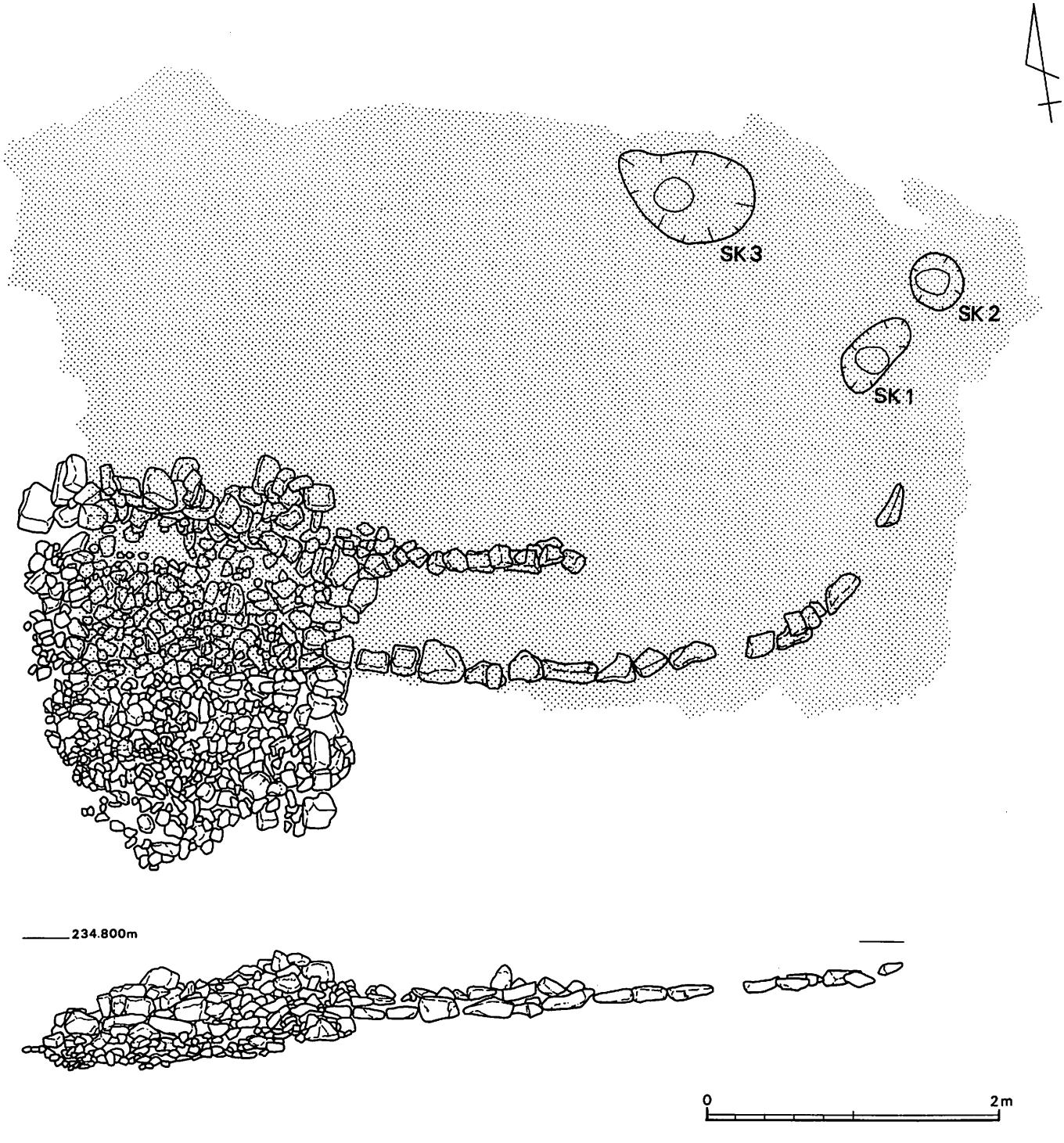
なお，積石内から出土した遺物（第7図1～4）は近世陶磁器片・古銭2（寛永通宝）・不明鉄器2（第7図1はカスガイか？）があるが，いずれも古墓に伴うものではない。陶磁器片の時期は18世紀以降のものが中心である。

積石除去後，古墓の基礎となる石列を検出した。これは，10～30cm大のやや細長い石を一列に約4mならべたものである。平面プランは西から東に向かってほぼ直線に伸び，その後北に向かって緩やかに曲がっており，このことから本来の古墓の形は楕円形であったものと思われる。また，この内側（北側）に長さ10cm前後の角礫を用いた石列が約1.2m東西方向に伸びている。

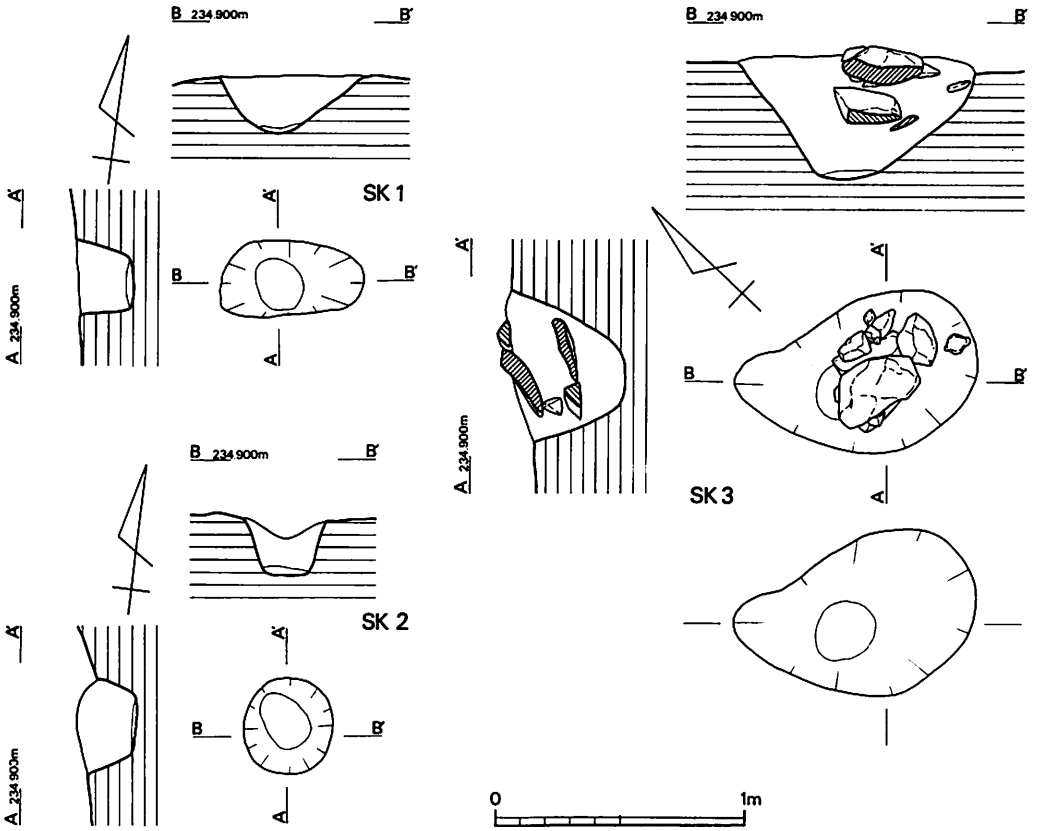
地下施設として3基の土坑をいずれも古墓の北東隅で検出した。ＳＫ1は3基のうちもっとも南側にある土坑である。上面は30×58cmの楕円形で，深さは約20cmである。埋土



第３図　長後林１号古墓積石部実測図（1：40）



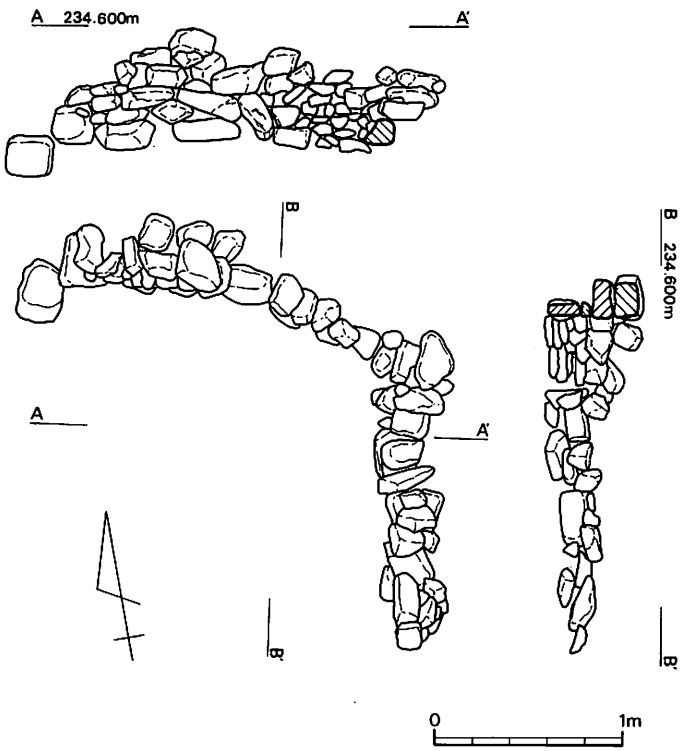
第４図　長後林１号古墓土坑・石列・石垣状遺構実測図（1：40）



第５図　長後林１号古墓土坑実測図（1：30）

は黒褐色土で，埋土中及び底部から多量の火葬骨を検出した。すべて細片であり，詳しい部位などは不明である。ＳＫ２はＳＫ１の北東に隣接する土坑である。上面は 36×38 cm のほぼ円形で，深さは約 16 cm である。底部付近から微量の骨片を検出したが，そのほかに遺物は出土していない。埋土は暗褐色土である。ＳＫ２は積石部の北東隅の突出部内にほぼ位置し，後に付設された可能性が高い。ＳＫ３はＳＫ１・２から約１ｍ北東にある土坑である。上面は 64×96 cm の不整楕円形で，深さは約 40 cm である。底部から約 20 cm 及び 35 cm の高さで，径 20×30 cm，厚さ 5～10 cm の扁平な石を検出した。これらは蓋石として用いられた可能性がある。また，底部付近からは微量の骨片を検出したが，そのほかに遺物は検出できなかった。埋土は暗褐色土である。

古墓直下の南西隅より石垣状遺構を検出した。後世の田畑の耕作による削平のため北辺 2.0 m，東辺 1.5 m のみ残存している。両辺は直角ではなく，若干開いている。使用している礫は径 15～25 cm，厚さ 10～20 cm のやや扁平な石が中心で，2～4 段に横積みもしくは小口積みを比較的乱雑に行っている。全体的に遺存状態は悪く，オーバーハングが目立

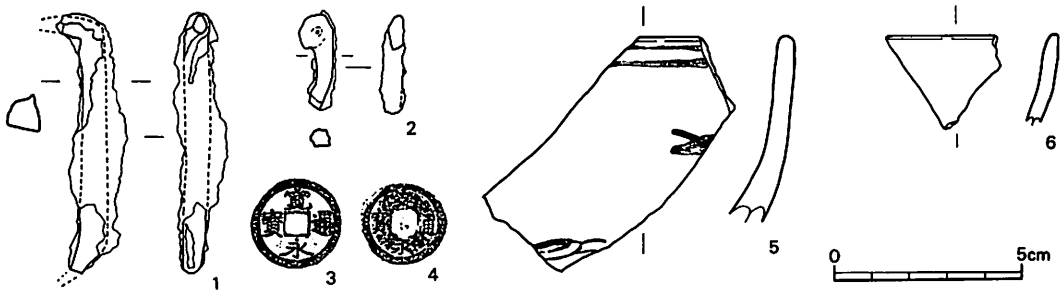


第6図　石垣状遺構実測図（1：40）

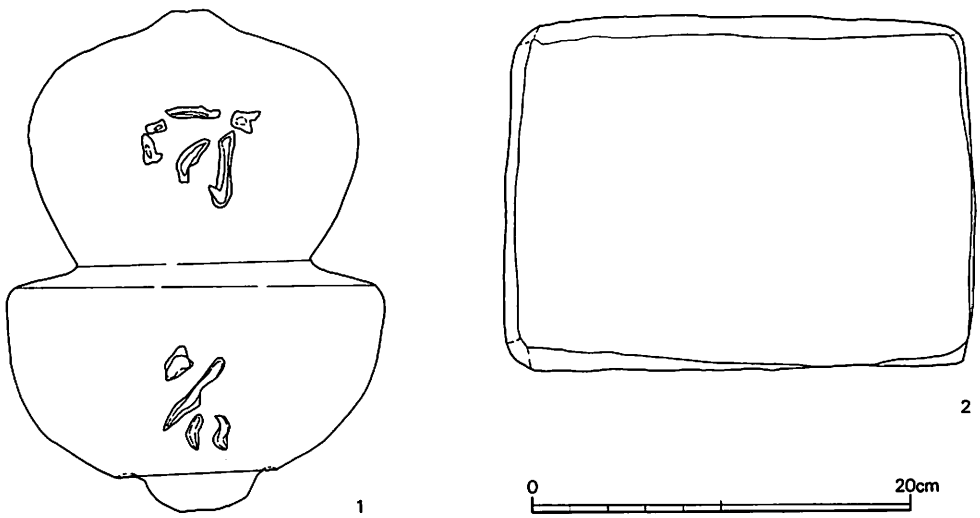
つ。なお，掘形は検出できなかった。また，この石垣状遺構の2辺に囲まれた範囲内では，石垣の下端のレベルで径10cm以下の小円礫を敷きつめたような状態で検出した。これらは地山面の直上に直接置かれており，この下からは遺構は検出できなかった。この遺構の性格は不明である。

石垣状遺構の埋土中からは，近世陶磁器と土師質土器が数点出土している。出土状態はいずれも遺構に伴うものではない。図示しうる遺物は2点の陶器片のみで，いずれも積石下の石垣状遺構埋土下層で検出した。第7図5は肥前の陶胎染付碗である。現存高5.3cm，口径は不明である。表面は灰色で透明釉を施し，外面に青〜緑色の染付を施す。また断面は暗灰白色で，胎土中に砂粒などはほとんど含まない。時期は18世紀代に属すると思われる。第7図6は瀬戸・美濃系の碗である。現存高2.4cm，口径不明。表面は灰白色で透明釉を施す。また断面は明白褐色で胎土は黒色の微砂粒をわずかに含んでいる。時期は18世紀代に属する[1]と思われる。

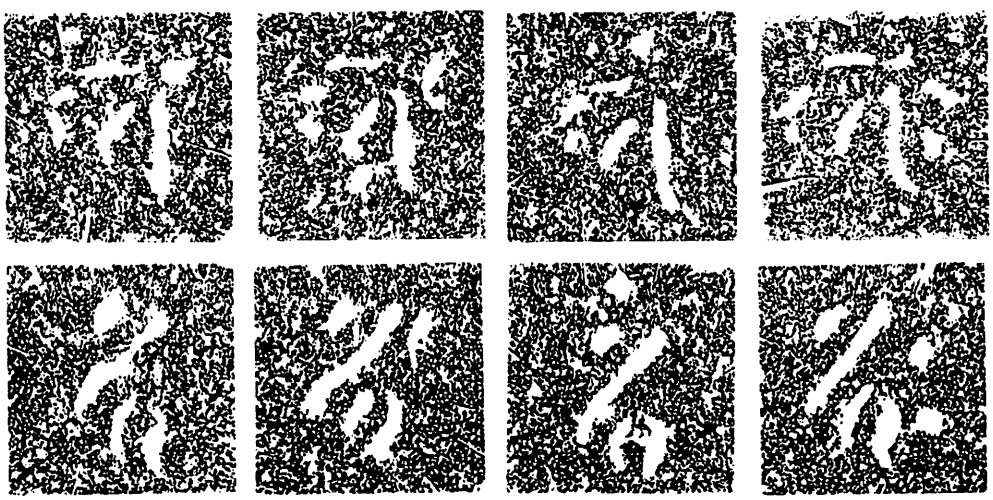
そのほか遺構の周辺で五輪塔の空風輪1（第8図1）・地輪1（同図2）を検出した。いずれも田畑の区画に利用されており，原位置を移動している。空輪は宝珠形で下部がよくすぼまっている。高さ13.3cm，最大幅17.3cm，風輪と接した部分の径12.4cmである。風輪は深鉢形で下端には枘（ほぞ）を造り出している。枘の周囲には深さ2〜3mmの浅い溝がまわっている。高さ13.0cm，最大幅20.0cmである。空輪・風輪ともやや不明瞭ではあるが，薬研彫でそれぞれ種字が刻まれている。石材は花崗岩で，遺存状態はかなりよい。空風輪には，仏教の思想で万物の構成要素である五大（空風火水地）のうち空・風を表わす𑖀・𑖭が刻まれている。また，それぞれ各4面に刻まれている梵字は発心（東）・修行（南）・菩



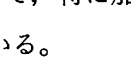
第７図　長後林１号古墓出土遺物実測図（1：2）
（1～4 は積石内，5・6 は石垣状遺構）



第８図　五輪塔実測図（1：4）



第９図　空風輪梵字拓影（1：3）

提（西）・涅槃（北）を表わしており，空輪は  ，風輪はである。地輪は25.0×26.3×18.7 cmで，特に加工の痕跡はみられない。石材は花崗岩で，空風輪に比べてやや風化が進んでいる。

空風輪の時期は形態から南北朝時代のものと思われる。

（註）

(1) これらの陶器片の種類や時期に関しては，佐賀県松浦郡有田町教育委員会の村上伸之氏のご教示による。

2．長後林2号古墓

長後林2号古墓は，吉田町大字多治比1240－3に所在する。1号古墓の南約130 mの位置にある。現状は標高約221 mの南北に細長い水田のほぼ中央に遺存している。

基壇の平面は円形に近く，現存規模は直径約1.00～1.20 m，高さ約0.60 mである。このほぼ中央部に墓標石と思われる立石を1個有する。これは高さ約50 cm，幅約25 cm，厚さ約15 cmの自然石であり，南側の面は平坦面を成している。これを取り巻くように円形状に角礫を積み，立石を支えている。角礫の大きさは10～40 cm前後と不揃いであり，また，積み方も乱雑で，基壇の上面および側面の凹凸は大きい。基壇の高さは立石を除くと地山直上から約43 cmを測る。基壇の盛土は暗褐色粘質土である。

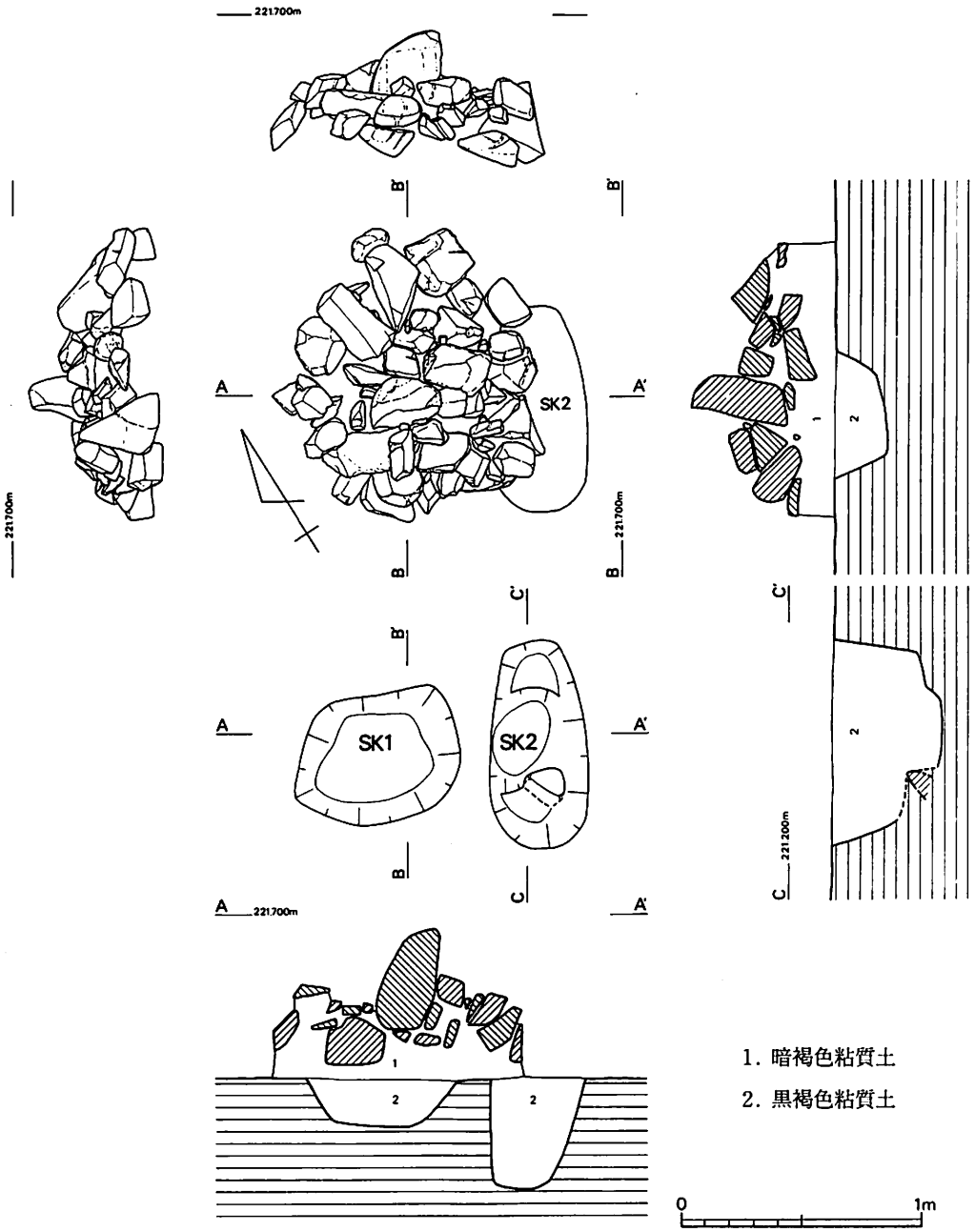
地下施設として2基の土坑を検出した。いずれも地山面から掘り込まれており，古墓に伴うものと思われる。

ＳＫ1は古墓中央部の立石のほぼ真下に位置する。平面は不整円形で，底部は狭く，壁はゆるやかに立ち上がる。規模は直径55～70 cm，深さ24 cmである。

ＳＫ2はＳＫ1の東側に位置する。平面は南北方向に長い楕円形で，底部は南北両端に明瞭な段を有する。規模は長径約86 cm，短径40 cm前後，深さ46 cmである。ＳＫ1・2いずれの埋土も黒褐色粘質土で小礫や炭を若干含むが，骨片などは確認されなかった。

遺物は，基壇盛土及びＳＫ2埋土から近世陶磁器の細片が数点出土している。

以上，形態や出土遺物などからみて，近世以降に営まれた古墓と思われる。



第 10 図　長後林 2 号古墓実測図（1：30）

IV. ま　と　め

調査の結果は前述の通りであるが，これらをふまえて若干の考察を加えてみたい。

吉田町は戦国大名毛利氏の拠点であり，町内にはこれに関連する城跡・屋敷跡・神社・墓所などが点在し，またこれらにまつわる伝説・昔話も数多く残されている。吉田町の東に位置する多治比は元就が幼年時代を過ごした地でもあり，毛利氏あるいは戦国時代にまつわる伝説やそれに相当する遺跡が数多くみられる。例えば，長後林1号古墓は昔から首塚などとよばれており，また長後林古墓群の西約750 mに位置する日南1号古墓は毛利元就の乳母の墓とされている[1]。当初，長後林古墓群はそのような言い伝えや猿掛城の直下に位置することなどから，天文9 (1540) 年の郡山合戦に関わりのある遺跡であることが予想された。しかし，長後林1号古墓は遺構にともなう遺物こそないものの，下部にある石垣状遺構の埋土中の遺物や，また積石内から出土した陶磁器類などからも18世紀代，あるいはそれ以降の時期の遺跡であることが判明した。長後林2号古墓も出土遺物からほぼ同時期の古墓であると思われる。

長後林1号古墓は，調査前は東・南・西の3方が基壇状に積み上げられており，また北半分は水田下にあったことから，あたかも水田に接して基壇が設けられているような状態であった。調査前の西壁の状態は図示していないが，東・南壁より整然と積まれており，水田の石垣との新旧関係から最近積みなおされていることがはっきりしているため，調査前に除去した。さらに調査の結果，東・南壁も後世に積まれたことがわかり，古墓の平面形が当初は楕円形であったことを考えると，後に周辺を水田化する際に3方を長方形の基壇状に囲み，周囲と区画したものと思われる。ただ，古墓の北半分は水田下にあることなどからも，当時すでに墓としての機能は失っていたものと思われる。

すでに本文中において，本古墓の平面形が元来楕円形であったものと想定したが，このことについてやや詳しくみてみたい。調査において積石部除去後に検出した石列は約4 mにわたって伸びている。使用されている石は長さ10～30 cmの細長い石で，中には断面が三角形のものもあり，積み重ねにはやや不適当である。また，これらはすべて横長に並べており，これらのことからもこの石列は基壇の基礎などではなく，墓域の周囲を囲む意図をもって置かれたことが見受けられる。この石列が墓域の周囲を一周していたとすれば，検出したのはその約¼にあたる。

土坑は3基検出したが，すべて北東に集中しており，そのうちＳＫ2はすでに述べたように後に付設された可能性が高い。土坑内には骨片のほかは遺物はなく，木棺や骨蔵器な

どは用いず土坑内に直接火葬骨を埋葬したものと思われる。ただＳＫ１は埋土上層で板状の石を検出しており，蓋石として用いられた可能性がある。

広島県内では近年のほ場整備事業の増加により，古墓の調査例が徐々に増えつつある。それらの一般的な形態としては円形や長方形が多く，埋葬主体も土坑内に木棺や骨蔵器を納めるのが一般的である。また，基壇をもつものも多い。そのなかで長後林１号古墓と形態の類似した遺跡としては三次市糸井町の糸井第４号古墓[2]と賀茂郡大和町の王子原積石墳墓[3]が挙げられる。時期は両遺跡とも中世末から近世に比定されている。糸井第４号古墓は11.5×8.5ｍの隅丸長方形[4]で高さは2.2～2.5ｍである。裾部に列石をもつが，埋葬主体は本古墓と異なり方形の凹部をもつ土塁状積石部内にある。一方，王子原積石墳墓は6×3.7ｍの楕円形[5]で高さは0.7ｍである。列石はもたないが，埋葬施設は中心を離れた位置で積石下の板石直下で木炭・火葬骨などが出土しており，本古墓とよく似た様相を示している。

埋葬主体を更に詳しく見ると，長後林１号古墓は埋葬主体が中心からずれており，これらが主要な埋葬ではないことを窺わせる。中心部からは土坑は検出できなかったことなどから，土坑は掘らずに地面に直接遺体を並べ，その上を河原石で覆ったものとする考え方と，実際には墓ではなく供養のための施設であるとする考え方の２通りの想定が可能である。前者に相当する古墓には吉田町大字吉田の森山積石塚[6]があり，後者の例では山県郡豊平町の伴造遺跡[7]が挙げられる。本古墓は積石下に人骨が認められないことから後者の例に属すると思われるが，前者の可能性もあり，ここで結論づけることはできない。

以上みてきたように長後林１号古墓の形態に類似する古墓は少なく，これらが被葬者の差や時期的・地域的な特徴としてとらえられるかどうかは現時点でははっきりせず，今後の調査例の増加を待ちたい。

天正19（1591）年の毛利輝元の広島移城にともない，家臣団・寺社などの広島への移住・移転が行われ，吉田町は毛利氏一門の墓所のある地として重んじられた。また，その後の毛利氏の防長移転にともない，以前の城下町は雲石街道の一宿駅と姿を変える。一方多治比は石見路が東から北へ通り，長後林周辺も交通の要所として栄えたであろう。しかし18世紀の多治比村に関する史料はほとんどなく，村の様子などは不明な点が多い。ところで，芸藩通志の多治比村絵図には本古墓のあるあたりに「長後休（ママ） 井上備前 同 豊前 宅址」の記述が見られ，更に巻68には「井上備前宅址　多治比村上殿にあり，（中略）井上豊前宅址　同村千川にあり，」と書かれている。千川は現在も地名として残っており長後林の北から東の地域にあたる。一方「上殿」という地名は現在はなく，絵図からみればほぼ現在の長後林の

位置に比定できる。長後林はその名が示す通り昔は林だったよう[8]で，近世の長後林は屋敷跡→林→田畑と移り変わっていったようである。長後林1号古墓周辺だけが現在も水田化されず，畑として利用されているのはその名残であろう。ただ，長後林古墓群がどの時点で営まれたものか，逆に言えば本古墓が営まれた18世紀には周辺の様子はどうであったかは不明であり，これは今後の研究の課題である。

（註）

(1) 吉田町郷土史研究会『吉田町の伝説昔ばなし』 昭和63 (1988) 年

(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『糸井古墓群発掘調査報告』 昭和59 (1984) 年

(3) 椋梨埋蔵文化財発掘調査団『椋梨ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査概報』 昭和45 (1970) 年

(4) 報告書では「旧状はほぼ長方形を呈していたものと思われる。」としている。

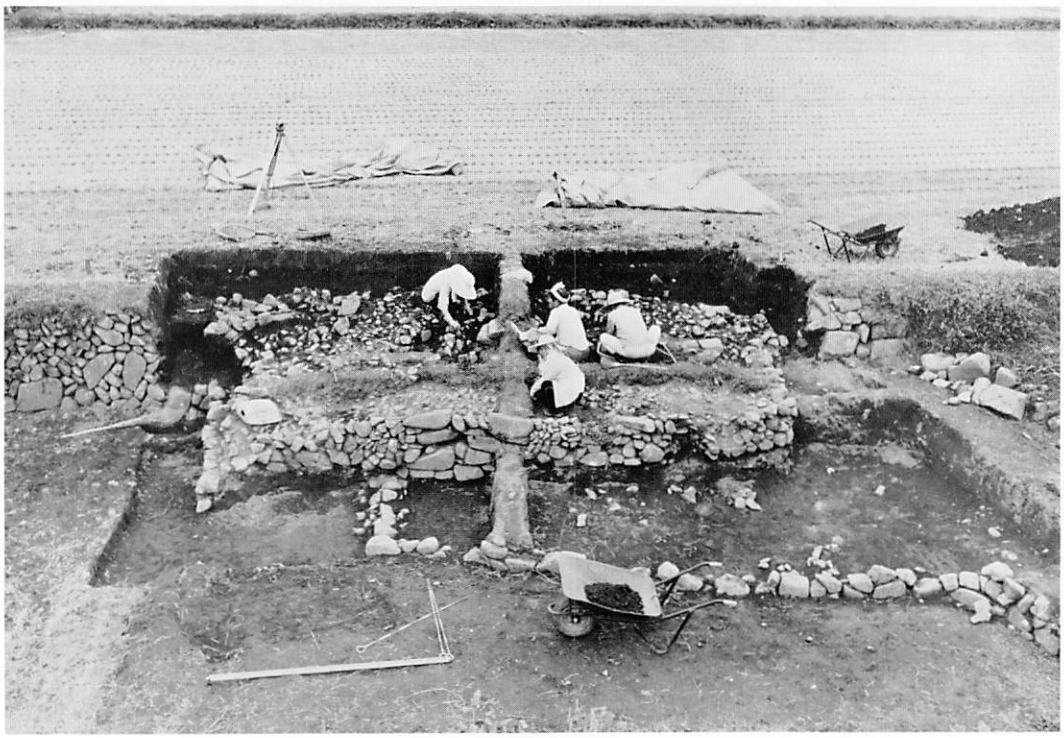
(5) 報告書では「当初から楕円形かどうかについては問題であり，他の例からすると長方形である可能性が強い。」としている。

(6) 広島県教育委員会『広島県高田郡吉田町森山積石塚発掘調査概報』 昭和50 (1975) 年

(7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『伴造遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第65集　昭和62 (1987) 年

(8) 地元の人の話による。

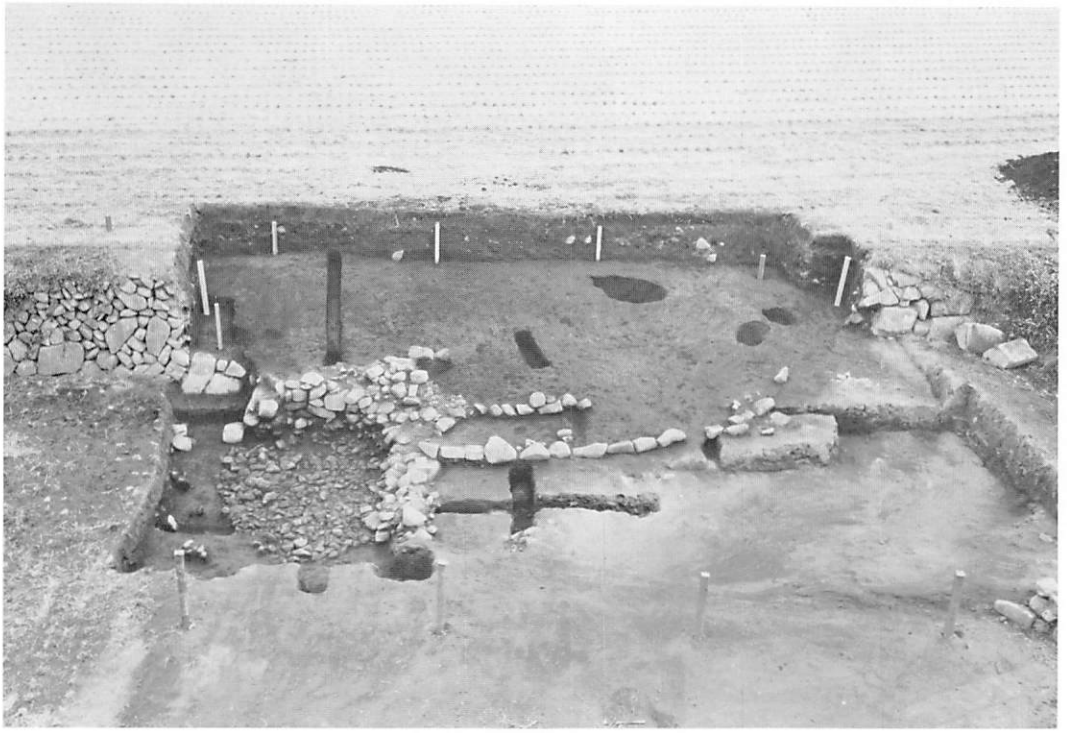
a．長後林古墓群遠景（北から）



b．長後林１号古墓作業風景（南から）

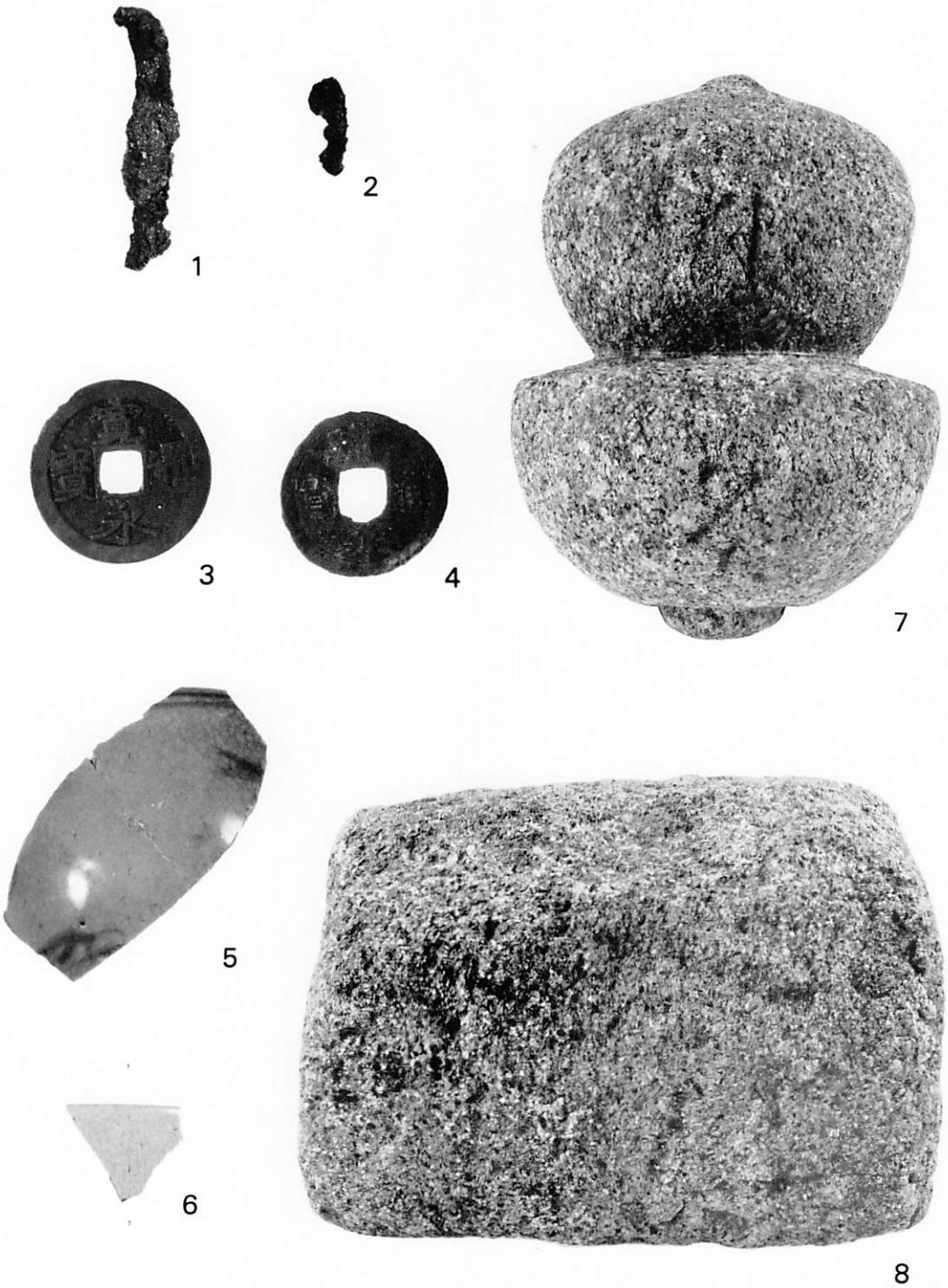
a．長後林１号古墓積石部検出状況（南から）

b．同　上（西から）



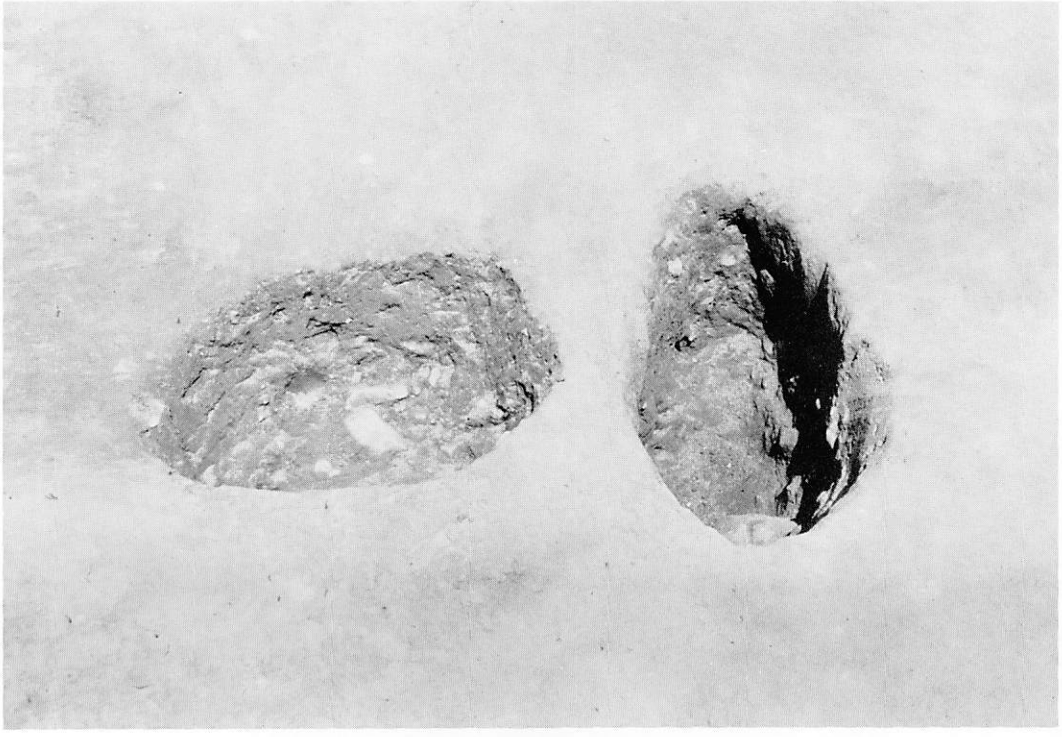
a．長後林１号古墓積石部除去（南から）

b．同上石垣状遺構検出状況（西から）



長後林 1 号古墓出土遺物

a．長後林２号古墓検出状況（南から）



b．同上完掘状況（南から）

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第79集

長後林古墓群発掘調査報告書

発行日 平成元(1989)年 3 月

編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
〒733 広島市西区観音新町4丁目8-49
電話 (082) 295-5751

印 刷 電子印刷株式会社